

# フィールドノーツについての覚え書き

## —フィールド情報の組織化と構造化についての試み—

佐藤 郁 哉

### 1. はじめに

近年のコンピュータ・テクノロジーの急速な進歩は、フィールドワークのあり方に文字通り革命的な変化をもたらしつつある。比較的単純なテキスト処理や数値計算から高度な画像処理や膨大な民族誌資料のデータベース化あるいは複雑な多変量解析にいたるまで、今日の野外調査にとってコンピュータは不可欠の道具の1つであると言っても過言ではない (BOONE & WOOD 1992 ; 杉田・洪・山本 1992)。

近年特に目ざましいのは、小型軽量ながら高速のデータ処理が可能なCPU (中央処理装置) と大容量の記憶装置を搭載したパーソナル・コンピュータ (以下「パソコン」) の開発とそのフィールドワーカーの間における急速な普及である。パソコンのフィールドへの導入は、現地調査を行なっているまさにその現場でデータを直接入力し各種の処理や分析を行なうことを可能にする。その適用範囲は、フィールドノーツやフィールド日記の記入という日常的な作業から親族体系の「エキスパート・システム」を利用した分析にいたるまで多岐におよぶ。フィールドワークの調査技法としての最大の強みの1つは、データの収集、データの分析、そして理論の構築という3つの作業を同時並行的に行なえるという点にあるが (佐藤 1992 : 160 ; LOFLAND & LOFLAND 1984 : 132), 高性能で小型軽量のパソコンの登場は、コンピュータが定量的なデータ処理だけでなく定性的なアプローチにとってもはかり知れない価値を持つことを示している。事実、欧米では、フィールドワークにおける定性的なデータを処理するための様々なタイプのソフトウェア (以下しばしば「ソフト」) が、研究者たち自身の手によって開発されてきた。

この中でも最も注目し値するのは、定性的資料の要となるフィールドノーツ

(SANJEK 1990) をデータベース化して処理するために開発された各種のソフトウェアである。フィールドノーツをデータベース化して柔軟に運用する試みは、これまでも、主に紙メディアの帳面やインデックス・カード（日本ではいわゆる「京大カード」）を用いてなされてきたが、電子メディアによるフィールドノーツのテキスト処理は、この作業の能率を飛躍的に上昇させるだけでなく、データの収納スペースという点でも大きな利点を持っている。これについての最新の情報に関しては TESCH (1990) および LECOMPTE & PREISSE (1993: 279-314) が詳しい。彼（女）らによれば、この種のソフトは、代表的なものだけでも ETHNOGRAPH (MS-DOS機種用), HYPERQUAL (Macintosh用), QUALPRO (MS-DOS), TEXTBASE ALPHA (MS-DOS) の4種をはじめとして既に10種類以上におよぶという。また、*Cultural Anthropology Methods* (略称CAM, ニュースレター) や *Qualitative Sociology* にもしばしばフィールドノーツを処理するためのソフトウェアに関する記事や論文が掲載されている。

残念ながら、著者の知る範囲ではこれら欧米産のソフトは未だ日本語ベースで利用できる形で移植されてはいない。日本でもフィールドワークの科学的技法としての性格に関する自己反省的な研究が登場するようになり (佐藤 1992: 26), また社会科学全般においても定性的調査の再評価が行なわれるようになっている現状を考えあわせるとき、フィールドノーツ処理用の日本語版ソフトが未開発であることはきわめて遺憾な状況と言わざるを得ない。

以下本稿では、まず初めにフィールドノーツをデータベースとして運用する際の基本的な発想について解説し、ついで、市販の日本語用アプリケーション・ソフトのいくつかを組み合わせることで欧米のフィールドノーツ専用ソフトとよく似たテキスト処理を行なうための方式の概要について紹介する。後述するように、本方式は操作体系の異なるソフトウェアを併用しているために操作が繁雑であり、また使用上さまざまな制約がある。本稿のねらいの1つは、不満足なものではあるが著者が試行的に運用した上である程度の有効性を確認した方式を紹介することによって、将来日本でフィールドノーツ用のソフトウェアが開発される際に参考となるであろういくつかのヒントを提供することにある。

## 2. フィールドノーツ用ソフトの基本的な発想とその意義

### 1) 基本的な作業のあらまし

フィールドノーツ用のデータベース・ソフトは、「テキスト型データベース」ないし「文書型データベース」とよばれるタイプのソフトウェアにあたる。この種のデータベース・ソフトは、従来の一般的なデータベース・ソフトにくらべてデータの定型性という点で大きな違いがある。すなわち、従来のデータベース・ソフトの多くは、住所録や文献カードを電子化したソフトに典型的に見られるように、項目の数が比較的限られた定型的なデータを対象にしていた。これに対して、テキスト型データベースは、日記やフィールドノーツのような、1件のデータの長さもまちまちならば、記入項目の数や種類もはっきり決まっていな非定型的な文書データをまるごと扱うことができる。この点からすれば、従来のデータベース・ソフトとくらべてかなり異質な性格を持つものといえる。もっとも、本来データベースとは、データや資料を体系化して検索する手がかりを与えること自体をさしていたことを考えあわせれば、項目数や各項目の記入欄の長さなどについて厳密な規格に沿ってデータを入力する必要がある従来の一般的なデータベース・ソフトの方がむしろデータベースのあり方としては特殊な例であると言えないこともない。

さて、フィールドノーツ専用ソフトの場合、原データであるフィールド・ノートブック（野帳）の記載を体系化し検索する手がかりを与える作業は、①特定部分のマーキングおよび「セグメント」としての切り出し（segmenting）と②コードの付与（coding）の2種類の操作によって行なわれる。さらに、フィールドノーツの記述をもとにした分析や解釈という作業は、①②の操作を通して切り出されたテキストの部分のうち特定コードを付与されたものを選び出し適当な順番に並べ変えて③貼りつける（collating）操作によって行なわれる。これは、従来の帳面とインデックス・カードを利用した紙メディアのデータベースでいえば、①帳面に清書されたノーツ<sup>1)</sup>の特定箇所に鉛筆やペンでマークをつけて、その部分をカードに書き写し、②カードのコード欄に書き込みをし（パンチカードの場合は同時に該当する箇所にパンチを入れる）、③特定コードをつけたカードを選び出し整理して分析する、という作業にほぼ対応する。

カードを中心にした紙メディアによる情報整理法は、日本では「知的生産」「知的生活」あるいは「KJ法」などの名称で広く知られ、フィールドワークのような、現場の知見から理論を立ち上げていく、帰納的な性格の強い研究方

法や実践活動に適しているとされてきた（川喜田 1967, 1973；梅棹 1969）。フィールドノーツ用ソフトはこの作業を電子化することによって、さらに能率的で柔軟な情報処理と迅速な分析を可能にする。すなわち、電子化されたカードは紙のカードに比べて収納スペースの節約という点ではるかに優れているだけでなく、検索に関してもカード方式とはくらべものにならない程のスピードで作業が行なえるのである。さらに、カードの複製という点でも電子的なカードには大きな利点がある。すなわち、よく複数のコードが1箇所のフィールドノーツの記載に該当することがあるが、紙のカードの場合には該当するコードの数だけカードを複製する必要があるのに対して、電子のカードの場合には、比較的単純なキー・ボード上の操作でほぼ同様のことが瞬時に出来るのである。これらの利点をあわせもつフィールドワーク用ソフトは、データの処理速度を飛躍的に上昇させ、それを解釈と分析における思考の速度に限りなく近づける道を拓いたと言える。

## 2) コーディングの意味と意義

上に述べた①切り出し、②コードディング、③貼り付けの3つの作業の内、①と③はイメージとしても思い浮かべやすく比較的容易に理解されるだろうが、②に関しては、若干の説明が必要であろう。というのも、コーディングという場合、通常は、厳密な方針のもとに体系化された分類コード表とコーディングの方針についてのマニュアルがあらかじめ準備されていて、それに沿って対象にコードを付与していくという印象があまりにも強いからである。たとえば、図書の分類コードだったら日本十進分類法にしたがって書物の背や文献カードの記入欄に書き込むコード（たとえば通過儀礼に関するものであったら385）、質問紙の場合には回答内容にしたがって割り振る特定の数字や記号（たとえばハイだったら1、イイエだったら0）が、この典型的な例である。

このようなタイプのコーディングが、事前に用意されたリストの中のコードを対象にあてはめていく、いわば「天下り式」のコーディング作業だとしたら、フィールドノーツ専用ソフトにおけるコーディングは、フィールド・ノートブックの記述の整理と分析の作業を進めていく中でコード体系そのものを構築していく「たたき上げ式」のコーディングであることが多い。すなわち、フィールドノーツ用ソフトは、フィールドノーツという定性的なデータを分析し解釈していく作業を通して、そのデータを構造化していくためのコード体系、さらに

はそのコード体系と不即不離の関係にある分析と解釈の枠組みないし「理論」を同時に創り出していくことを容易にするのである。<sup>2)</sup>

この点からすれば、フィールドノーツ用ソフトにおけるコードは、分類コードというよりは書物の索引に近い。(事実、このコードは、最終的にまとめられる民族誌の索引のひな型としての役割を果たす。)あとで实例を見ていくが、この種のソフトにおけるコーディングの結果としてフィールド・ノートブックのテキストの中に書きこまれるマーク、つまり、しばしば「タグ」(付箋ないし荷札の意)とよばれるマークは、書物の注番号に類した「索引番号」ないし「索引記号」とでも呼べる索引コードとして考えることができるのである。すなわち、1冊の本を書き上げた後にその内容を何度も読み返しながら本文にマークを記入したり付箋をつけたりしながら索引を作り上げていくように、<sup>3)</sup>フィールドノーツ用ソフトのユーザーは、数冊のバインダーにまとめられたフィールドノーツを1冊の書物に見立てて初めから終わりまで通して読みながら要所要所にマークを書き込んでいく。そのマークはキー・ワードや略称からなり、一方ではセグメントとして切り出すべき部分の初めと終わりの区切りを示し、他方ではそのセグメントが索引表中のどのカテゴリーに対応するデータ(ないし实例)であるかを示す。フィールドノーツ専用ソフトで言う「コード」とは、とりも直さずこの索引表中のカテゴリーを示す略称やキー・ワードのことなのである。

単行本としてまとめられた民族誌の末尾につけられる索引には、具体的な地名や人名の他に抽象的な専門用語が含まれていることが多い。これと同じように、フィールドノーツ専用ソフトを使用してノーツのファイルに付与していくコードには、具体的なかつ日常的な記述カテゴリーから高度に専門的な学術用語のように抽象度の高い分析カテゴリーにいたるまでさまざまな種類のカテゴリーが対応している。<sup>4)</sup>また、1つのセグメントに数種類のコードが付与されることも稀れではない。たとえば、ある村落における祭についての寄り合いのエピソードには「寄り合い」という比較的「理論負荷性」が明示的ではないカテゴリーを示すコードに加えて、その寄り合いが含意する「集団構造」や「近代化」「交換原則」などという抽象的な分析カテゴリーを示すコードが付与されることもある。

仮説検証的な性格の強いフィールドワークの場合には、分析カテゴリーを示すコードとして使用したキー・ワードもしくは数字やアルファベットの任意の

組み合わせ（たとえば M 0011 が近代化の徴候を示すというように）のほとんどが既存の理論用語に対応し、またあらかじめまとまったコードのリストやコーディングに関するマニュアルが準備されていることも多いだろう。しかし、何度も言うように、調査技法としてのフィールドワークの最大の強みは、書物に書かれた事柄だけではなく現場における知見のただ中から理論を立ち上げていくことにある。そのようなアプローチをとる場合、コードのリストはフィールドノーツをはじめとする資料やデータがある程度集まった段階で何度も修正されていく。また、調査の折々に構築され改訂されるコード体系は、逆にその後の資料収集の方針やフィールドノーツの記述の枠組みに大きな影響を与えていく（LECOMPTE & PREISSE 1993, 292 ; SANJEK 1990 : 386-389 ; BECKER, GORDON & LEBAILLY 1984）。そして、そのようにしてコード・リストを修正していく中でそれぞれのコードに対応する記述カテゴリーないし分析カテゴリー相互の関係が徐々に明らかになり、一方ではフィールドノーツ自体の記述が「分厚い」ものになり<sup>5)</sup>、他方では、現場に即した既存の理論用語とは異なる新たな分析カテゴリーをも含む「データ密着型」の理論（GLASER & STRAUSS 1968）が構築されていくのである。

### 3) 貼りつけ作業と「中間テキスト」の生成

以上のような手続きを経て構築され徐々に練り上げられていくコード体系の構造は、最終的に書き上げられ公表される民族誌の目次や索引の構成（特に索引における複数の「サブエントリ」間の関係）に直接間接に反映されることになる。この意味で、フィールドノーツ用ソフトによってコード体系を幾度となく構築しまた改訂していく作業は、現場の社会と文化および人々の生活という原テキストを出発点とし民族誌という文字テキストの完成を終点とする一連のプロセスの中で、「中間テキスト」を生成し練り上げていく作業として考えることができる。

さきあげた「貼りつけ」というプロセスは、この中間テキストの生成にとって最も重要な作業となる。貼りつけというのは、特定のコードが付与されたフィールドノーツの記載箇所（セグメント）を適当な順番で並べてモニターの画面やプリンターから出力する作業のことであるが、これによって、そのコードに該当する分析・記述カテゴリーに関して、常に現場における知見に立ちかえりながら考察を深めることが出来るのである。また、貼りつけ作業によって、その

カテゴリー（コード）をさらにいくつかのサブカテゴリー（サブコード）に分けたり新たなカテゴリーを作ったりしていくようなことも出来る。さらに、フィールドノーツ用ソフトの中には、検索条件を細かく設定することによって、2種類のコードが重複しているセグメントやどちらか一方のコードが付与されているセグメントの全てを検索して貼りつける機能や、以上の諸作業を通して徐々に構築されていくコードの一覧表をその折々に出力する機能を備えているものもある。これらの機能もまた、コード（カテゴリー）間の複雑な関係を割り出していく上で重要な役割を担うことになる。

これまで述べてきたことから明らかなように、上記の作業のほとんどは従来の紙のカードを利用した方式でも実現可能である。専用ソフトを使った方式は、これを単に電子式に置き換えまた作業の能率をいくぶん上げただけのように見えるかもしれない。しかし、電子式のやり方は、時には数万枚にもおよぶ紙のカードという、かなりの収納スペースを要するハードウェアを弁当箱程度の大きさの装置で置き換え、また、これまで多大の時間をかけて行なってきたカードのシャッフルやソートという作業を単純なキ操作で瞬時にまた何度でも繰り返して行なえるようにしたという2つの面での改良を通して、フィールドワーカーに単に作業の能率を向上すること以上の大きな可能性を拓き、フィールドワークという調査法にとって質的な変化をもたらしたと言える。つまり、データの分析を現場ないし現場に近い場所でしかも調査期間のあいだに繰り返し行なえる道が拓かれたのである。現場にいる間にフィールドノーツの綿密な分析を行なうということは、MALINOWSKIの昔から幾度となく指摘されながらも多くのフィールドワーカーが果たし得なかったことである（SANJEK 1990：209-235, 389-392）。この意味でも、欧米で開発されたソフトの日本語版あるいは日本語用に新たに開発されたフィールドノーツ用のソフトウェアの登場が待望されるのである。

### 3. 試行的データベース化方式のあらまし

以下本稿で紹介するのは、次のような4種類の市販の日本語ソフトを組み合わせ、これまで述べてきた欧米のフィールドノーツ用ソフトで実現可能な処理に似た作業を行なう方式のあらましである（「エディタ」や「アウトライン・プロセッサ」等については後述。）— ①MIFES（エディタ・ソフト。メガソフト社製）、②MISS.EXE（①の付属ユーティリティの1つである文字列検索

用プログラム。メガ・ソフト社製), ③発想の達人 (テキスト型データベース・ソフト。エーアイ出版社製), ④PEMO (カード形式のアウトライン・プロセッサ。市販品ではなく, パソコン通信等で入手できる「シェアウェア」とよばれるソフトの1つ)。

作業の概要を帳面と紙のカードを使った従来の方式になぞらえていえば, MIFES と MISS. EXE を使って行なうのは目と手を使ってフィールド・ノートブックをめくり特定の箇所を探し出して索引欄に該当するコードを記入する作業である。「発想の達人」はその部分をセグメントとして切り出しカードに貼りつける糊とハサミの役目を果たす。PEMO は, そのカードを箱におさめ, 適宜並べ変えて整理し分析するための道具である。紙メディアの場合の, コピー機を使ってカードを複製する作業は, それぞれのソフトの「コピー」と「ペースト」という機能で代用する。

以上のように, それぞれのソフトの役割は, 必ずしも, 前述した①切り出し, ②コーディング, ③貼りつけ, という分類に一对一で対応してはいない。これは, 以下で紹介する実際に行なう作業のステップについても同様である。つまり, 前述の作業の3分類はあくまでも作業の内容を概念的に理解するための便法であり, 実際には, それぞれの作業は前後しまた重複するところが多いのである。

#### 4. 具体的な手順

##### 1) ファイル形式とファイル名の規格化

フィールドノーツを電子的に処理するためには, 清書されたフィールド・ノートブック<sup>6)</sup>の記述が既にパソコンやワープロによって作成された電子ファイルになっている必要があることは言うまでもない。さらに, 本方式や欧米のMS-DOSベースのフィールドノーツ用ソフトでデータを加工するためには, この電子的な文書ファイルを「(MS-DOS標準) テキスト・ファイル」ないし「アスキー・ファイル」とよばれるファイル形式に変換しておく必要がある。これは, かつては特殊な変換ソフトや変換サービスを必要としかなり費用も手間もかかる作業であったが, 最近では比較的簡単にできるようになった。ワープロ専用機の場合には, それぞれの機種に特有のファイル形式をテキスト・ファイルに変換するためのプログラムが付属品として添付されるようになったし, 各種ワープロソフトにも, ほとんどの場合, 同様の変換を行なうためのオプショ



ンがつくようになったからである。

ファイル形式の統一に加えて、本方式では、ファイル名の形式を統一しておく必要がある。これに関しては、フィールドノーツの日付を一定の字数であらわしたものが便利である。たとえば、1993年5月1日の一日の出来事をそれが起きた順番通りに書き連ねたフィールドノーツのファイルであったら「FN930501.TXT」、同じ年の10月12日のものだったら「FN931012.TXT」にする。民族誌をまとめる際には、フィールドノーツの他にフィールド日記の記述やインタビューや聞き書きの記録もデータベース化の対象にしておく都合がよいが、そのような場合は、日記だったらたとえば「FD930501.TXT」、インタビュー記録だったら「IN930501.TXT」という具合にする。このような形で日付で統一したファイル名を使えば、カードのイメージでデータベース化した場合でも、さらにそれを元にして索引を作った場合でも、どこに目的の記述が含まれているファイルがあるかが一目で分かる。さらに、フィールドノーツとそれ以外の資料とのつき合わせが容易にできるという利点もある (cf. MEAD 1975 : 304)。

## 2) コーディング

本方式におけるデータベース化に際して最初に行なう作業の内容は、紙メディアの場合とそれほど変わるところがない。フィールド・ノートブックを何回もくり返して読み直しながら、その記述に対してフィールドワーカーの問題関心にそってコーディング・マークをつけていくのである。1つの記述が複数のコーディングのカテゴリーに該当する場合は、必要な数だけマークをつけていけばよい。<sup>7)</sup>

マークを書き込む場所は該当する記述の近辺であればどこでも構わないが、著者は、図1のようにフィールドノーツに小見出しをつける<sup>8)</sup>ために使っている左のマージン部分に記入するようにしている。こうすると、マークを挿入してもノーツ本体の字数や行数に及ぼす影響が少なく済む。また、印字したノートブックを手でめくりながら目で確認して検索する時も作業が容易になるという利点もある。<sup>9)</sup>マークを書き込む作業は、一般のワープロ・ソフト（「一太郎」や「松」など）でも出来るが、MIFESのような、もともとはプログラム作成のために作られたものであるが高速のワープロ・ソフトとしても使える「エディタ」と呼ばれるソフトを使うと、より迅速にファイルの読み込みと修正および登録ができる。

コーディング用のマークとしては、マージンのスペースにおさまり、また後でそれぞれのコード別のファイルを新たに作成する時にもそのままファイル名の一部として使用できるように漢字2語からなる略称を用いている。たとえば、図1の例 — 以下のノーツは全て架空の例である — では、「祭準備会議」という小見出しの記述の箇所には、「@祭会（祭についての会議）」という記述カテゴリと「@集構（集団構造）」という分析カテゴリの2つのマークが付されている。先頭に@という普通の文章では滅多に表われない記号を使用しているのは、1つには、目で見た時に容易に識別できるようにするためであるが、もう1つの理由は、次に述べる検索と切り出し作業の際に、本文の中の文字列とコード・マークのついた文字列との区別が容易に出来るようにしておくためである。

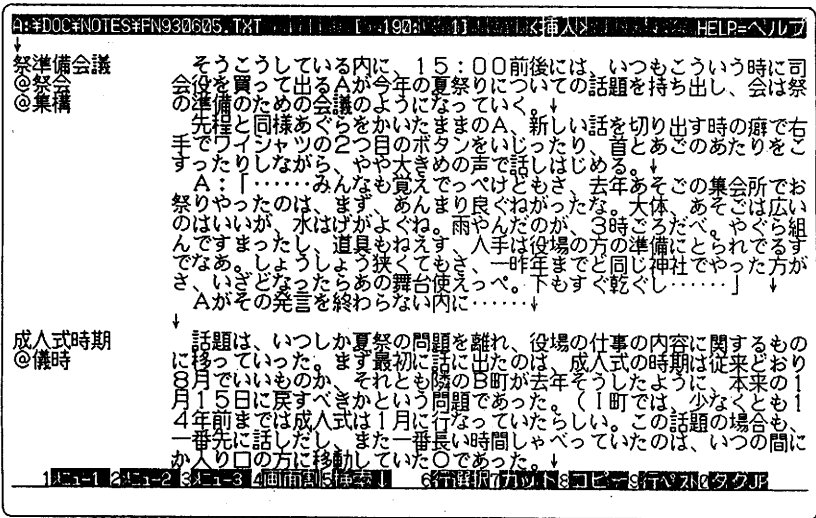


図1 コーディングのマークを付したフィールドノーツの原ファイル (MIFESの画面)

### 3) 文字列の検索と切り出しファイルの作成

コーディングの作業が一段落したら、次は検索と切り出しの作業に入る。ここで使用するのが文字列検索ツールとしてのMISS.EXEである。文字列の検索機能自体は、今ではほとんど全てのワープロ専用機やワープロ・ソフトに備

わっているが、多くの場合1つのファイルの中での検索しか出来ない。MISS.EXEのような文字列検索専用のプログラムは、これに対して、複数の文書ファイルの中から指定した文字列を探し出し、さらにその文字列の前後の部分の切り出して新しいファイルを作ることができる。これに加えてMISS.EXE（あるいはそれとよく似たツールであるMIFIND.EXEやGREP）には、この「切り出しファイル」の出力の際に、先頭に「タグ情報」という、「ドライブ名、ディレクトリ名、ファイル名、行番号」の4つの部分からなる文字列（図3の画面でいえば、1行目の「A:¥DOC¥NOTES¥FN930605.TXT 190」という文字列）を出力するオプションがある。これが画期的なのは、MIFESやVZエディタなどのエディタ・ソフトを使用している時にこの文字列の先頭にカーソルを置き「タグ・ジャンプ」という機能を使えば、自動的にそのファイルをオープンし指定の行にカーソルを移動させることが出来るという点にある。すなわち、後で見るように、このタグ情報をうまく使えば、切り出しファイルを利用して該当する記述の箇所を即座に参照することができるのである。

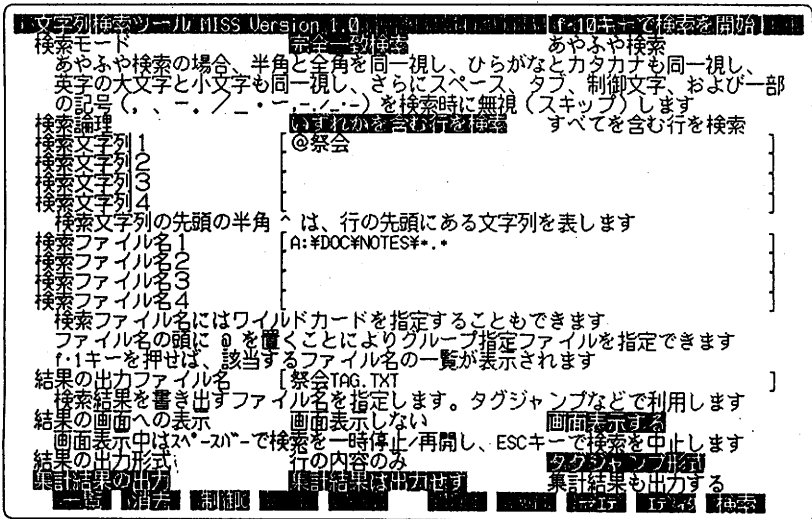


図2 文字検索ツール MISS.EXE の画面

図2は、MISS.EXEの起動時に表示される会話型の操作画面でいくつかの

検索条件を指定した例である。条件の入力が終わった段階でf・10[検索]を押すと検索作業に入り、その結果がファイル（この例では、「祭会TAG.TXT」というファイル）に書き出される。検索が終了してから、f・9[エディタ]を押すと、MIFESがその検索結果のファイルを読みこんで起動する。図3に見るように、そのファイルは、それぞれタグ情報の文字列を先頭にし検索文字列を含む部分を切り出した形になっている。

```

A:祭会TAG.TXT
A:DOC#NOTES#FN930605.TXT 190: 祭準備会議
OO前後には、いつもこういう時に司@祭会
りについての話題を持ち出し、会は祭@集構
ていく。↓
A:DOC#NOTES#FN930623.TXT 62: 祭会議
おきにくはずだった夏祭の準備の@祭会
なっていた。今日集会所に集まった
人。KとRは、急に入った役場の仕
事情について後でDに確認してみ
かけの方針に対する反感が大きいら
していたという。↓
A:DOC#NOTES#FN930713.TXT 41: 祭会議：中止決
夏祭りについての話し合いも、今日定
しい。夕方、DやAとともにTで呑@祭会
ら始まった会議の様様について次の
[EOF]
~
~
~
~
1行カー-1 2行カー-2 3行カー-3 4画面割付検索し 6行選択/カー-1 8行編集/行カー-5/カー-6

```

図3 MISS.EXEの検索結果のファイル＝「切り出しファイル」

#### 4) セグメントの指定と登録

切り出しファイルはタグ情報の文字列が先頭に入ってマージンの部分がずれているため非常に見づらくなっているだけでなく、検索文字列を含む部分の最初の改行マークまでしか出力されていない。これに対して、フィールドノーツの原ファイルでは、カード形式として貼りこみたい記述箇所がその改行マークを越えて記載されていることも少なくない。また、その記述箇所を別のカテゴリのデータとして繰り返し使いたいことも多い。つまり、検索文字列の周辺の記述を任意の幅でセグメントとして切り取り、さらにそれをストックしておいて、いつでもまた何度でも繰り返し取り出してカードの形で貼りこめるようにしておく必要があるのである。

この、切り出し・保存・貼りこみの3つの作業をするのが、「発想の達人」というソフトである。発想の達人は、それ自体がテキスト型データベースとしての性格をもつソフトであるが、「常駐型」と呼ばれるソフトの1つでもあり、他のプログラムを実行している最中に呼び出して異なるソフトの間で文字データを受け渡しする道具として使うこともできる。つまり、Aというソフト（ここではMIFES）で作った文書のいくつかの部分を切り出して登録しておいて、必要に応じてそれをBという別のソフト（ここではPEMO）で作るファイルの色々な場所に貼りこむことができるのである。紙メディアのデータベースでいえば、ノートブックの必要な箇所を切り取った紙片の束を箱にしまっておき、必要に応じてそれを改めてカードに貼りつける作業に該当する。こういう、紙と糊とハサミを使うやり方だと、複数の項目に該当するカードはいちいちコピーを作らなければならないが、電子化してある場合には、「コピー」や「ペースト」という機能を使ってきわめて短時間のうちにまた何度でもそれができるといふ利点がある。（詳しい操作法の解説や「発想の達人」を呼び出した状態のモニター画面の実例については、桜田・ウィンクシステムウェア（1991）参照。）

##### 5) カードへの貼りつけ・カード間の相互関係の決定

発想の達人では、基本的に、ノーツから切り出した部分をその切り出した順番のままストックしておくことしか出来ない。したがって、切り出し部分を発想の達人のデータベースに登録しただけでは、紙のカードの場合のように、前後を入れ替えたり、カードを取り外したり、追加したりする作業の中で、フィールドノーツの記述の中に存在する共通のパターンを発見し、また複数のカテゴリーのあいだの関係を探るような操作は出来ない。

紙のカードで出来るこれら一連の作業とよく似た操作を電子的に行なうようにしたのが「アウトライン・プロセッサ」や「アイデア・プロセッサ」とよばれるソフト（「IDOQ」「創考」など）である。PEMOはその中でも「KJ法」に最も近い感覚で使えるプログラムである。つまり、PEMOは何も書かれていない白紙のカードの束のようなものと考えることができるのである。PEMOには「編集モード」と「一覧モード」という2つのモードがあり、編集モードでは、パソコンのモニターの画面を1枚分のカードに見立てて内容を書きこんだり編集したりすることができるが、一覧モードにすれば、各カードの第1

行目だけを表示して複数のカードを一覧表示することができる。発想の達人のファイルにストックしておいたセグメントは、この編集モードの状態ではPEMOのカードに貼りこんでいき、一覧モードで整理していく。

一覧モードでは、図4の例に示したように、複数のカードをいったん一定の順番で並べた上で、前後を入れ替えたりカード間の階層関係を設定して相互の関係を割り出していくことができる。<sup>10)</sup> この作業がとりも直さず、2で述べた、フィールド・データに常に立ちかえりながらカテゴリー（コード）間の関係を割り出していくことによって、現場における知見から理論を立ち上げていく過程に他ならない。そして、図4に見られるようなカテゴリー間の構成を編集していく中で、民族誌の索引のひな型が最終的に構築されていくのである。<sup>11)</sup>

A: #PEMO#祭事.DAT		[ 17 / 28 ] (十覧)		1997年9月25日(火) 12:08	
祭					
↓種類と時期					
春祭					
会議					
A: #DOC#NOTES#FN921205.TXT	34:	準備会議①: 執行部選出・その他の入選			
A: #DOC#NOTES#FN921212.TXT	185:	準備会議②: 後援とりつけについての議論			
A: #DOC#NOTES#FN930105.TXT	156:	準備会議③: 機材借りだし			
A: #DOC#NOTES#FN930112.TXT	234:	準備会議④: プログラム印刷			
↓本番					
夏祭					
会議					
A: #DOC#NOTES#FN930605.TXT	190:	会議①: 場所の選定に関する議論			
A: #DOC#NOTES#FN930623.TXT	62:	会議②: 意見の分裂			
A: #DOC#NOTES#FN930713.TXT	41:	会議③: 中止決定			
祭中止にまつわるエピソード					
A: #DOC#NOTES#FN930815.TXT	83:	成人式における会話			
A: #DOC#NOTES#FN930901.TXT	76:	居酒屋での会話			
1 終了 2 設定 3: I/O 4 移動 5 検索 6 マーク 7 印刷 8 印刷: 9 実行 10 電話					

図4 PEMOの一覧モードの画面

## 6) 問題点

以上は本方式についての概説的な説明であるため、一見きわめてスムーズな流れで一連の作業が行なわれているような印象を受けるかもしれない。しかし、実際には複数のソフトを組み合わせて使っているために様々な制約がある。まず、1つ1つの作業を終える度にそれぞれのソフトを終了させて別のソフトを

起動しなければならないという不便さがある。また、個々のソフトで細かな操作方法が異なっているのも使い勝手を悪くしている（カーソルの移動のためのキイ操作1つをとっても、たとえばMIFESとPEMOには、微妙な違いがある）。さらに、実際にフィールドノーツを分析していく際には、5)で示したような祭事というカテゴリーに関するPEMOのファイルを直接他のカテゴリー——たとえば婚姻儀礼というようなカテゴリー——のPEMOファイルと連結させて分析する必要が生じることがあるが、本方式の範囲では、それも不可能である。

欧米で開発されたフィールドノーツ用ソフトの場合は、ここにあげたような難点のほとんどが解決されている。これら欧米のソフトの多くが研究者自身の手で開発されてきたことを考えても、現場のフィールドワーカーの細かな要望に即応できる日本語用のソフトが人類学者たち自身の手によって開発されることが切望される。<sup>12)</sup>

## 6. おわりに

近年、海外でもまた日本でもフィールドワークや民族誌のテキストとしての性格についての議論が盛んである（佐藤 1992: 160；関本 1988；谷 1991）。これは文化人類学が自己反省的な学問として成長していく上で不可欠の作業であり、また大いに歓迎すべき傾向である。しかし、SANJEK (1990: xi) が指摘するように、この種の議論においては、もっぱら「作品 work」や「書き物 writing」としての民族誌の性格と民族誌の公表をめぐる社会文化的もしくは政治経済的な状況の分析が中心になっており、ともすれば「民族誌を書く前に人類学者が書くもの」、すなわちフィールドノーツそのものについての議論がおろそかにされてきたきらいがある。

SANJEK (1990) によれば、欧米の人類学者のあいだでは少なくとも次のような4つのタイプの書き物がフィールドノーツという名称で呼ばれてきたと言う——①現場でメモ用紙などに書きこまれたメモ書き、②①などを元にフィールド・ノートブックやカードに清書した記録、③聞き書きの記録、④フィールド日記やフィールド日誌。これまで述べてきたことから明らかなように、本稿で主に扱ってきたのは②の意味でのフィールドノーツである。SANJEKは、これを「本来の意味でのフィールドノーツ fieldnotes proper」と呼び、そして次のように主張する——「実際に出来事が起きたその順番に記録され、広範

な領域にわたるトピックをカバーした、かなりの量におよぶ〔本来の意味での〕フィールドノーツの山は、民族誌的調査の要である」(SANJEK 1990:100)。

しかし、本来の意味でのフィールドノーツは、同時に私的な日記に近い非常にプライベートな性格を持っている。民族誌についてのテキスト論議がさかんな反面でフィールドノーツが無視ないし軽視されてきた理由の1つには、フィールドノーツが本来的に持つこの私秘的な性格<sup>13)</sup>があることは疑い得ない。この意味で、フィールドノーツは民族学にとって「パンドラの匣」であったと言える。同じように、私秘的なフィールドノーツというテキストと、それとは正反対にできるだけ多くの人々に読まれることを期待して書かれることが多い民族誌というテキストとの間にははるかな懸隔があるが、この2種類のテキストの間にあるギャップを埋める作業の詳細についても、従来きわめて不十分な議論しかされてこず、一種のブラックボックスとなっていた感がある。

本稿で解説したフィールドノーツ用ソフトは、この懸隔を埋めブラックボックスの蓋を開けていくための第一歩であると言える。しかし、そのような試みは同時に、パンドラの匣を開けてしまい、フィールドワークにともなうきわめてデリケートな問題を不用意に公けのものにしてしまう事態を招く危険性を持っている。しかし、パンドラをめぐる神話の最もよく知られているバージョンの語るところによれば、あらゆる災厄の種が出てしまったあとの匣(あるいは壺ないし甕)には最後に「希望」が残されていたのである。フィールドワークが真に自省的な方法として再生するためには、フィールドノーツというパンドラの匣の蓋をあえて開けることも含めて一度この方法のあり方について徹底的に問い直し、その作業が招来するであろう混乱と混迷を乗り越える中で再び希望を見いだすよう努力するしかないのかも知れない。

**謝辞** 本稿作成においては、茨城大学・植野弘子助教授に貴重なご示唆をいただいた。記して感謝の念を捧げます。

#### 注

- 1) フィールドノーツには様々なタイプのものがある。本稿では一貫して一日の出来事を書き連ねて清書した記録をフィールドノーツとして取り扱っている。これについては、本稿の「おわりに」参照。
- 2) 質問紙などの自由記述項目についての事後的な「ポスト・コーディング」も、一種



のたたき上げ式コーディングと言えないこともないが、現場の知見から理論を立ち上げるうえでの可能性という点に関してはフィールドノーツに対するコーディングに比して著しく劣る。

- 3) 書物の索引とフィールドノーツの索引コードの間には、1つ大きな違いもある。すなわち、書物の場合には通常最終的なテキストを書き上げた後で索引が作成されるのに対して、フィールドノーツの場合には、本文のテキストの作成と索引の作成は同時進行的に行なわれる。この点だけからすれば、目次の方が、執筆の途中で折々に構成が変わっていく可能性があるという意味で索引コードの体系に近いかもしれない。
- 4) 観察における「理論負荷」の問題を考えれば、「記述カテゴリー」と「分析カテゴリー」の区別がそれほど厳密なものではないことは言うまでもない。
- 5) CLIFFORD が示唆するように、GEERTZ のいう「分厚い記述」は民族誌家に対する次のようなアドバイスとして解釈できる — 民族誌家はまず最初に現場における観察をメモ書きとしてのフィールドノーツの形で「書きとめ *inscribe, write down*」, さらにそれを現地の生活の文脈にすえて理解し解釈したその結果を清書したフィールドノーツおよび民族誌の「分厚い記述」として書き上げる (*write up*) べきだ (GEERTZ 1973; CLIFFORD 1990: 67-68)。
- 6) 注1および「終わりに」参照。
- 7) これには、2通りのやり方がある。1つは、あらかじめフィールド・ノートブックを手でめぐりながら鉛筆などで書き込みをし、それをもとに同じようなマークを電子的なファイルに書き込むというやり方であり、もう1つは、直接電子的なファイルに書き込むというものである。いずれにせよ、この作業自体をパソコンで自動化できるようなプログラムは今のところ無い。もっとも、手作業で試行錯誤的にコーディングの作業をすること自体が現場の知見からの理論の立ち上げという点では不可欠の作業と言える。
- 8) この小見出しの使用に見るように、著者は、フィールドノーツを清書する段階で既にある程度セグメントを設定している。本稿で紹介した方式を用いる場合は、この暫定的なセグメントをそのまま1枚のカードに見立てる場合もあれば、さらに小さなセグメントに分割する場合もある。
- 9) このマージンを利用してコーディング・マークを記入するやり方は、ETHNOGRAPH および TEXTBASE ALPHA と同じであるが、この2つのソフトには、行番号を指定してコードを書き込み特殊な専用ファイルを作る機能がプログラム自体に備わっている (SEIDEL, KJOLSETH, & SEYMOUR 1988) のに対して、本方式

の場合はテキストファイル自体にあらかじめ空白スペースとしてのマージンを設け、文字としてコードを書き込むというきわめて素朴なやり方をとっている。

- 10) この例では、各カードの一行目にタグ情報とカードの内容を要約したタイトルがついているが、これは、上記の4)の段階でMIFESを使って書きこんでおいたものである。
- 11) 本稿では、紙幅の関係で割愛したが、PEMOで作ったファイルをテキスト・ファイルとして出力し、それを編集することによって、図4によく似た索引を作ることができる。この索引ファイルをタグ・ファイルとして使えば、索引を見ながらそれぞれの項目に該当するフィールドノーツの原ファイルを瞬時に開いて参照し、また瞬時に索引に戻ることができる。ただし、このタグ・ファイルの作成もかなり手間のかかる作業であり、この点も専用ソフトでは自動化が望まれる。
- 12) 日本にも「知子の情報」(テグレット社製)や「パワー・サーチ」(アシスト社製)のように、フィールドノーツ用としてもある程度使用可能なテキスト型データベース・ソフトがあるが、どちらも汎用であるため、フィールドノーツ処理用のソフトとしての理想からはやや遠いものがある。
- 13) フィールドワーク自体につきものの私秘的な性格については、MITCHELL (1993)が最新の論考を提供している。

#### 引用文献

BECKER, Howard, GORDON, Andrew, & LEBAILLY, Robert

1984 "Field Work with the Computer" *Qualitative Sociology* 7 : 16-33.

BOONE, Margaret & WOOD, John

1992 *Computer Applications for Anthropologists* Belmont, Calif.: Wadsworth.

CLIFFORD, James

1990 "Notes on (Field)notes" In SANJEK (1990).

GEERTZ, Clifford

1973 *The Interpretation of Cultures* New York : Basic Books.

GLASER, Barney and STRAUSS, Anselm

1967 *The Discovery of Grounded Theory* Chicago : Aldine.

川喜田二郎

1967 『発想法』 中央公論社.

- 1973 『野外科学の方法』 中央公論社.
- LECOMPTE, Margaret & PREISSLE, Judith  
1993 *Ethnography and Qualitative Design in Educational Research* San Diego : Calif. : Academic Press.
- LOFLAND, John & LOFLAND, Lyn  
1984 *Analyzing Social Settings* Belmont, Calif. : Wadsworth.
- MEAD, Margaret (和智綏子訳)  
1975 『女として人類学者として』 平凡社 (*Blackberry Winter* New York : William Morrow 1972).
- MITCHELL, Richard  
1993 *Secrecy and Fieldwork* Beverly Hills, Calif. : Sage.
- 桜田一・ウインクシステムウェア  
1991 『発想の達人』 エーアイ出版.
- SANJEK, Robert (Ed.)  
1990 *Fieldnotes* Ithaca, New York : Cornell University Press.
- SEIDEL, Jhon, KJOLSETH, Rolf, & SEYMOUR, Elaine  
1988 *The Ethnograph : A User's Guide* Corvallis, Oregon : Qualis Research.
- 佐藤郁哉  
1992 『フィールドワーク』 新曜社.
- 関本照夫  
1988 「フィールドワークの認識論」 伊東幹治・米山俊直編 『文化人類学へのアプローチ』 ミネルヴァ書房.
- 杉田繁治・洪政国・山本泰則編  
1992 『民族学情報有効利用のためのコンピューター応用手法についての基礎研究』 ([国立民族学博物館研究報告別冊17号]).
- TESCH, Reneta  
1990 *Qualitative Research* New York : Falmer Press.
- 谷泰編  
1991 『文化を読む』 人文書院
- 梅棹忠夫  
1969 『知的生産の技術』 岩波書店